

第7回

博報教育フォーラム

レポート Hakuho Education Forum Report 2010



**体験だけではない、心と体を揺さぶるような、印象深い学び。
「ライブの学び」をともに考えてみませんか？**

第7回博報教育フォーラムは、「本物に触れたときの、五感や心の深い部分まで沁み込む、生きた学び」という意味を込めて「ライブの学び」をキーワードにしました。子どもも大人も、喜びや痛み、感動を知り、人や物事と深く関わる勇気を持って生きる。そんな学びをともに考えてみませんか？

Hakuho Education Forum Report 2010



テーマ:「ライブの学び」で得られるもの

第7回博報教育フォーラム基調講演 ダイジェスト

「ライブの学び」とは

無藤 隆 白梅学園大学教授

今回のフォーラムのテーマ「『ライブの学び』で得られるもの」を掘り下げながら、「身体感覚」「学びの一回性」などのキーワードを軸に、「ライブの学び」が持つ意味を白梅学園大学・無藤隆教授がわかりやすくお話しくださいました。



講師
無藤 隆(むとう・たかし)

白梅学園大学 子ども学部 教授
東京都生まれ
お茶の水女子大学・子ども発達教育研究センター教授などを経て、2004年に白梅学園短期大学教授・学長に就任。2007年より現職。主著に『現場と学問のふれあうところ 教育実践の現場から立ち上がる心理学』（新曜社）、編著書に『質的心理学講座第1巻 育ちと学びの生成』（東京大学出版会）他。

point 1 限定的な授業を超える「ライブの学び」

第7回博報教育フォーラムのテーマは「ライブの学び」です。私は特に2つのことを考えたいと思います。1つは、事例発表に出てきます「体験的な活動」あるいは「教科外活動」。もう1つは、教室での授業です。ライブといえば、CDで音楽を聴くことに対するコンサート、生演奏ですね。先生による授業も子どもを前にした「ライブパフォーマンス」です。しかし、ライブのような気がしないときもある。学校の基本的な学習活動は、集中することを求め、集中するためには余分な刺激をシャットアウトします。基本的には机に座り、教科書を前に「ことば」によって考えることが求められ、授業中は子どもが発言したことへの根拠を問うことによって思考力を育てていきます。子どもは「これこれだから、こうだと思う」と、理由や根拠を挙げるように育っていきます。そこまでが通常の授業ですが、それだけでいいのかと問うのが「ライブの学び」です。授業で学んだことやことばは、さらに子どもたちの体験をもとに生まれてくるし、社会の中でも育っていくものです。子どもたちが「学ぶ」「わかる」ということは、自己の成長にもつながるわけで、算数で学ぶことは「算数の時間」にとどまりません。また、「本物」に出会って、生き生きとした感情を持つと、印象が深い。学んだこともしっかり定着すると思います。

point 2 その「場」で偶発的に起こることを取り込む

農家の方に田植えの仕方を教わるなんていうのも、田んぼまで連れて行ってもらうとリアルになる。臨場感が出る。それは単なるテクニックではなくて、本質的な意味がある

と思います。生身をその「場」に置く「身体感覚」、特に子どもの場合は「原始的感觉」ですね。「見る」「聞く」に対する、「触る」「においをかぐ」という感触。「生態的なつながり」と言うと大げさですが、田んぼなら土があり、稲があり、太陽があり、風が吹き、自分もその一部であることを身体で感じる。また、その「場」が世の中や現実の様々な出来事と結びつき、実際のものや人々とも否応なく結びついていく。ところが、場所は田んぼでも「農家の方が来るから質問を考えておこうね」と、学ぶ内容が始めから見えていたり、講義台本があって滔々とお話をされても、子どもはただ感心するというか、極端に言えばCDのように聞いてさえいればいいんですね。そこには、予想外の展開や現実の社会で出会うリスクはないわけです。偶発的に起こることをどう取り込んでいくか。これは「ライブ性」の非常に大事なところですし、学びにとっての「一回性」をどう考えるかということです。大人にとっても、予想外のことはいつでも起こります。通常の授業ではハプニングを前提にはしませんが、そういったリアルな出来事を無視するのか、組み込むのか。「社会的なやりとり」とは、そういうところまで考えるべきではないでしょうか。

point 3 「ライブ感」が学びを変える

学びの「一回性」ですが、子どもたちにとって「学ぶ」「わかる」ということは、その都度、一回限りの新たな出来事として起こるわけです。その場にいる子どもも一人ひとり違うし、先生も違う。その時間と場所で、目の前にいる先生や大人が「私」にどう教えるのか。子どもにとって、その経験自体が「学び」の意味と質を決定することです。学びの「ライブ感」は、その場で偶発的に起

きてくることを子どもが受けとめて、自分で迷ったり、ためらったり、表現できたり、振り返って先を見通せたりするコミット(自己関与)の感覚が最大のポイントになると思います。自分で発想し、企画し、計画を立てて、推進するような方向に進んでいく。現在進行形で、そこにどれだけ集中し、包み込まれ、没頭できているかが見える。事例発表でも紹介されますが、真剣に学ぶ子どもの姿に大人が感動し、「熱が熱を呼ぶ」学びの相乗効果が生まれる。同時に、「学び」にとって大事なものは、その場限りの体験ではなく、そこに自分の成長が関わっていることです。「成長」というのは、次の「知」への憧れを持って「学び」が積み上がっていくことであるし、自分が生きていくことに、この「学び」が関わるとわかることです。「ライブの学び」とは、45分という授業を超えて子どもが生き続けている、その現実につながってゆく学びなのです。



第7回博報教育フォーラム 「事例発表」「ポスターセッション」より

「子どもにとって何がいいのか」共通の熱い想いを持った個性と魅力あふれる教育実践が登場

Case1 大人も熱い、子どもが燃える「夏休みドキドキ学校」

東京都 大田区立久原小学校・久原小学校PTA・久が原地区自治会連合会



夏ドキ委員会 松田委員長による事例発表

7年目を迎えた「夏休みドキドキ学校」は「学校には子どもが育つ機会と場がいっぱいある」と考える久原小学校が、久原小学校PTA、久が原地区自治会連合会と運営する取り組み。教職員とボランティアの保護者がともに携わり、各講座は「子どものどのような力を育てたいか」を明確にして、体験的な活動を取り入れることにしている。「お寺できもだめし」(講座No.90)「実験しよう!ドロ水がきれいな水に大変身!」(講座No.62)など、学年にと

らわれず、「好きなこと」を共通の目的に集まった子どもたちが受講する100もの講座は、保護者が自ら講師になって企画・準備し、子どもたちに教えるというもの。活動を通じ「子どもが子どもを育てる」という学年を超えた交流も自然に生まれ、子どもと大人、保護者同士が互いに学び合う関係性が育った。地元企業も積極的に参加し、学校も保護者も「夏ドキというひとつの学びの場が、いろいろな方向へ大きく広がっている」と実感している。



ポスターセッション風景

夏ドキでの「ライブの学び」

「学校がオープンである」「好きが集まる」「大人が立場を超え、時間をかけてサポートする」が「夏ドキ」運営の<3つの秘訣>。結果を目的としない活動で、「ライブの学び」が生まれ、大人も子どもも学び合う。

Live!1 「東京横断ツアーII 東京の自然の芸術を見に行こう」(講座No.59)

企画・参加者:小学生9名、参加者兄弟の小学生低学年3名、中学生6名、保護者5名、教員2名

小学5、6年生がほぼ独力で見学コースを立案、情報収集し、多摩川源流と日野原鍾乳洞を見学に行く講座。昨年度は台風で中止になったため、卒業生が「リベンジ」で参加し、主役の小学生を陰ながら支えた。

1 キラリと光る中学生 講師の下敷きなしに時刻表、情報誌などで現地情報を集める。「ネットで検索したら?」と、中学生がさりげなくアドバイス。



2 ちゃんと着けるかドキドキ... 保護者と先生は付き添うだけ。金額を自覚するため、カードは使わずに切符を購入。遠足とは違う本物の緊張感が顔に。



3 いざ!鍾乳洞へ! 歩く 歩く 「自分たちで計画して実行する」「現実社会と向き合う」が講座の課題。山肌一面を染め上げる新緑を歩くのは「ライブ」ならではの楽しみ。



わあーすごい! じめじめしてる!! さむ〜い

4 予定外の行動と出会い バスの待ち時間が長く予定を変更。森林館を訪れる。知らない土地で心細くなっていたとき、館員さんの温かい親切が心に沁みだ。



5 最後は笑顔でバーベキュー! 先生方と中学生が火おこしと買出しを担当して待機。小さい子を先に食べさせる。緊張と疲れが見えた子どもたちも最後は笑顔に!

Live!2 「絵本クッキング おやつをつくろう!」(講座No.19)

企画者:読み聞かせ活動 現PTAとOG有志

絵本の読み聞かせの後、作品に登場する料理を、小学1~3年生の子どもたちが自分で作ってみるという講座。保護者アンケートで「低学年向け講座が少ない」という意見を受け、人気の料理講座を開設した。

1 保護者だけど授業中! 「絵本の中に出てくる料理」という本から、低学年児童に向けたレシピを探し出し、時間配分、体験してほしい活動など綿密に準備して本番を迎える。



2 おはなしの世界へ... これから作るのは『ドーナッチャンとモンブラン』に登場するおやつ「トライフル」。読み聞かせて惹きつけて期待を高める。



よく見て、ちゃんと覚えてね!

4 トライフルがついに完成 「お家でやってくれるといいな」と講師は内心ドキドキ。そう思っていたら、レシピを希望する子が出てきた!



3 低学年でも「本物の包丁」に挑戦! 調理は実際に包丁を使って切ってみる。年齢やスキルは関係なく、「好き」だから集中できて印象深い学びができる。お母さんの目配りも真剣。



5 時間もびったり!大成功!! 「おいしい〜」。簡単なことでも、子どもがやると意外に時間がかかるもの。時間に余裕を作ることが、子どもに豊かな体験を与える。

第7回博報教育フォーラム 「事例発表」「ポスターセッション」より

Case2 トキを守り、地域に貢献する子どもたちの活動

新潟県 佐渡市立行谷小学校



鴻田校長による事例発表

行谷小学校は佐渡島のほぼ中央にあり、校区内にはトキを飼育している「トキ保護センター」と「トキの森公園」がある。昭和40年代に怪我をして保護されたトキを飼育し、それがきっかけで「トキの学校」として知られるようになった行谷小学校では、地域と連携し、トキに関わる様々な体験的な活動を行っている。3～6年生による「トキ解説員」はゴールデンウィークとお盆の時期、「トキの森公園」で一般の観光客を相手に手作り資料などをわたして観光ガ

イドを行う。学校近くで鳥を観察する「探鳥会」は、今年度は5月の土曜日の朝4時30分から7時まで、忍耐強く鳥を待ち、探しながら実施。「水辺の生き物調べ」ではドジョウやカエルやヤゴなど、トキの餌となる水辺の生物について調査した。トキを中心にした活動は「ローカル」の最も基本となる故郷を子どもたちが一層知ることにつながる。地元に着愛を抱き、真摯に学ぶ子どもたちを多くの大人たちがサポートしている。



ポスターセッション風景

行谷小学校での「ライブの学び」

本物の出会いから得られる「人として生きる喜び」「故郷に対する誇り」「地域貢献の精神」は、バーチャルな学習では得られない。自然が相手だからこそ得られる、思い通りにならない体験が「ライブの学び」につながる。

Live!1 「トキ解説員」(トキの森公園、トキ資料展示館)

参加者:行谷小学校3～6年生全員

「考えをわかりやすく表現できる子の育成」を目指す行谷小学校では、トキの森公園や園内にあるトキ資料展示館を訪れた観光客、修学旅行生たちに、トキについて説明する「トキ解説員」のボランティア活動を実施している。

1 「マニュアル」なしで解説 トキ資料展示館で少人数のグループに分かれ、打ち合わせ。「トキのえさカードを作ってみよう」。解説の内容・表現方法・手順は各々が考えて創意工夫。



ドキドキするけど、
がんばって
解説するので
聞いてください!!



2 こんにちは!「トキ解説員」です 最後の日本産トキ「キン」の剥製を見学している観光客に、早速「トキの解説をさせていただきます」と緊張して話しかけるが…。



3 よかった!解説を聞いてくれそう! 観光客のおばあさんが「お願いしようかしら」と快諾。やった!次は笑顔を決め、明るく元気に解説スタート!



4 自分の考えをわかりやすく表現 「羽の数は何枚知ってますか?」初めて会う大人にも「トキの学習」や専門家に教わったことをわかりやすく説明。



5 お礼のことが自信につながる 人と話すのが苦手だった子ども、何回もやって自信をつける。「ありがとう」と言われ「人の役に立てて嬉しい」と、さらに表現を磨く子ども。

Live!2 「水辺の生き物調べ」(潟上、田野沢・正明寺、長畝、青木地区)

参加者:行谷小学校全校生徒

「佐渡の空に再びトキを」を合言葉に、行谷小学校では毎年春と秋に「水辺の生き物調べ」を行う。校区内の4つの地域で、トキの食物となる生き物の生態や環境を調査することで、佐渡の自然や地域社会への知識と想いを深める。

1 トキを育む豊かな自然へ 各地域の田んぼや川、池などに出かけ、トキが食べる生き物や生育環境を季節の移り変わりの中で、五感でとらえる。「秋とちがって水がいっぱいだ〜」。



2 ボランティアティーチャーに教わろう! トキの野生復帰を目指す農家の方、NPO法人の方が子どもたちにレクチャーする。「水はあるけど生き物が少ないのは、なぜかな?」。

でっかいな〜!
ぬるぬるしてる…



3 ヨシノボりにだって触れるぞ! 子どもたちは自然にドジョウ、ヤゴ、カエルなどにも嫌がらず触れるようになる。中にはナマズを捕まえて頭を撫でちゃう子ども??



5 その場での「振り返り学習」が大切 生き物を捕まえて調べたら、図鑑を開いてその場で振り返る。目標は毎年の調査を通じて生き物の増減を比較する「大きな学び」。

第7回博報教育フォーラム 「事例発表」「ポスターセッション」より

Case3 3つの場、3つの世代をつなぐ「複眼の教育」

神奈川県 NPO法人鎌倉てらこや



上江洲事務局長による事例発表

「鎌倉てらこや」は、学校・家庭・地域の3つの教育現場と、子ども・若者・大人の3つの世代を結ぶ「複眼の教育」という視点から、地域で「感動体験」「よき人との出会い」を与える「生きた教育活動」を続けている。企画運営を大学生ボランティアが担うのが特徴で、お寺合宿や陶芸教室、朗読教室など、鎌倉の歴史や文化、自然を基盤に活動。8月に行われた建長寺合宿では、子どもたちが一気呵成に1日半で屋台を準備して作る「祭」を企画。

学生たちは、子どもたちがどう考え、感じ、力をぶつけあってほしいか、それを達成するための行動指針を「①企む」「②夢中になる」「③共有体験する」というキーワードで明確化し、参加者を巻き込む「想い」として共有することで、子どもとサポート役の大人がともに育ち感動できる体験を導き出そうとする。当日の子どもたちからは「うちの班の屋台最高だよ!」といった感激のことも飛び出し、「熱」のこもるライブの学びの場になった。



ポスターセッション風景

鎌倉てらこやでの「ライブの学び」

子ども・若者・大人の3世代を互惠性のある関係として結ぶことによって、「生きた体験」を生み出している。子どもたちが活動に「没頭」できるようなシチュエーションの設定と整備が「ライブの学び」を効果的に引き起こす。

Live!1 「建長寺合宿 本気de建長寺」～お寺での生活～

参加者:子ども80名・学生50名(子ども10名・学生5名の班を8班編成)・保護者サポーター

鎌倉五山第一位建長寺で2泊3日の合宿を行う。子どもたちはお寺に身を置き、日本古来の「文化・伝統・歴史」を肌で感じ、「禅」に基づいた「坐禅」「読経」「食事の作法」など日常では触れることの少ない生活を体験。

1 お寺の生活は大忙し! 建長寺合宿当日。子どもたちは初対面の参加者たちと祭に出す「屋台」の企画や買出しをしながら、禅寺で初めての作務もこなす。



2 150人分の食事を3食作る! 合宿中の精進料理3食をお母さん方が作る。お母さん方は約1ヵ月前から周到な準備を重ねてきた。チームワークも必須。



食前食後に感謝を込めてお経を。おしゃべりは厳禁。



3 厳粛な法灯会(ほうとうえ) 食事の後は、仏門に入るための懺悔式を。お寺ならではの厳粛で非日常的な時間に、子どもたちは静かに心身を引き締める。



4 遊びの時間も大切 お兄さんやお姉さん相手に遠慮なくリラックス。合宿中、学生は子どもの心の動きや行動の「生き生きした」表情や変化に気を配る。

Live!2 「建長寺合宿 本気de建長寺」～お祭本番～

企画・運営:建長寺合宿参加の子ども・学生全員、地域サポーター、子ども・大人・高齢者・一般のお客さん

8/8の午後6時～8時半、建長寺の境内で子どもたちが「屋台」(各班1つ)を出店し、家族、友だち、親戚、地域の大人たちを招いて「祭」を開催する。子どもたちはゼロから約1日半で屋台を作らなくてはならない。

1 集中して共同制作 8/7午前10時半から1時間以内で屋台の企画、費用、販売価格などを子どもと学生が協議。「絶対にモグラたたき!」「射的はど?」。



2 これも買っていい? 屋台が決まったら買出しに。余分なものを買ったがる子どもと駆け引きしたり、子どもと学生の真剣勝負は続く…。

だんだん屋台っぽくなってきた!



3 お父さんチームもサポート お父さんチームの仕事は「盛り上げ役」と「力仕事」。「子どもたちの祭は、われら「チンドン隊」が盛り上げるぞ〜!!」



4 8/8午後6時、屋台オープン! 次第に会場の「熱」が高まっていく。珍しい小学生の屋台に大人も盛り上がる。「小学生が一生懸命、接客してくれて嬉しい!」



5 まぶしい笑顔で「やったぞ!!」 午後8時半、熱気に包まれ「祭」は盛況のうちに終了。子どもも学生も力を出し切り、やり遂げた充足感に笑顔を輝かせる。

第7回博報教育フォーラム パネルディスカッションより

「ライブの学び」で得られるもの

「ライブの学び」とは何か。いつ、どんな状況で生まれるのか。その具体的な条件や場面を、出演者全員が豊富な知識と実践から汲み上げながら、いま、そしてこれからの教育に大切な学びの形を巡って対話した「パネルディスカッション」。新しい風と刺激に満ちた90分間を、どうぞお楽しみください。



「ライブの学び」で生き生きと、感動する学びへ。



ライブと事前に結果を知っているのでは、感動が大きく違う。

鹿毛 最初に「ライブの学び」というテーマについて考えてみたいと思います。「ライブ」ということばで私が思いますのは、タイムリーな話題で、バンクーバーオリンピックです。テレビで放送される際には「生放送(ライブ)」と結果をニュース用に編集した「録画放送」がありますよね。昨日は高橋大輔選手が見事銅メダルを取りましたが、私の妻はそのシーンをライブで観ていました。私は学校からの帰り道で結果を知り、自宅に帰ってから録画でその映像を観ました。同じ事実を観たのだとしても、妻が観たライブと、私が観た録画では、感動が大きく違う。無藤先生の基調講演にもありましたが、「ライブ」には幾つもの要素、特徴があり、条件がある。たとえばワクワク感とか、ドキドキ感、さらに不安な気持ちもあるかもしれないけれども、そこで集中したり、没頭したりする。つまり現在進行形の体験がある。「いま、ここ(here and now)」ということばがありますが、その場で起こることの「リアルな感じ」であるとか、あるいは「本気」や「新鮮な感覚」であるとか、そういうものを「ライブ」ということばから読み取っていただければと思います。



を行っております。昨日、5年生の「学ぼうエコロジー」というブースで、お父さんがずっと発表を聞いていました。子どもたちは、いろいろと調べ、見学に行ったり、調査をしたりして、これで十分だと思って発表を終え「質問はありませんか?」と言ったんです。すると、そのお父さんが「ヒートアイランドの一番の原因は何だと思っ?」と問い返された。こういう質問は子どもたちにとっては「想定外」でして、発表後は「ありがとう」というのが予想された反応だったと思います。とっても厳しい質問で、子どもは三者三様「答えられなくて悔しかった」、「答えられるように、明日に向けて調べておこう」、「環境のことをしっかり考えている人がいて、うれしかった」という受け止め方をしました。これも「ライブ」ですね。想定外の反応がきて、そこで新たな「学び」が始まったということです。きっとそういう学びがいろんな人と関わる中で、あちこちでいっぱい生まれているんだらうなと思っています。

「ライブの学び」とは何か

鹿毛 登壇者の皆さんは「ライブの学び」とは何か、また、どんな条件があるとお考えですか?

鴻田 子どもたちの旺盛な好奇心に応えるものかと思います。知らなかった生き物を発見したとか、季節によって見つかる生き物が違うことがわかるとか。「トキの学習の何が楽しい?」と子どもに聞いたんです。そうしたら「トキのことは知れば知るほど楽しい」と言うんですね。「いままで知らなかったことが新しくわかるのが楽しい」と。ほかにも、観光客の方で「また来たい」とか「よくわかった」と言うてくださる人が結構いるらしくて「お客さんが喜んでくれる姿を見ることが楽しい」と言うてくれた子もいました。人としての生き方や志を教えてくださいませんかと思っています。



人としての生き方や志を教えてくださいませんかと思っています。

池田 「自分のことばを持つ」ということでしょうか。いま、大学生が意外と表現力が弱いというか、先生方も痛感なさっているだろうと思いますけれども、これが外へ出て、本で読むだけではない、自分の身体を通して学びますと、

「自分のことば」というのが出てきます。それがすごく貴重で、「てらこや」をやっている一つの喜びは、学生がそういう体験を通して変わっていくんですね。これは教室では味わえない。「学び」が学校だけではない、あるいは家庭だけではない、地域だけではない、あらゆる場で起こりうると思うんです。

「ライブの学び」を生み出す条件

清水 「ライブの学び」が起こる条件ですが、学校文化、子ども社会の中にあえて地域社会の風を入れる、地域の人たちを入れていく。すると、子どもたちの考えていた価値観とか考えが現実社会によって揺れ動くことがあります。先ほどのお父さんの質問ですね。そういうことを意図して仕掛けていくことがあると思います。それと、現実社会に子どもたちを出すということです。私の学校では、学校の傍を流れる川を2日間かけて東京湾まで歩くということを行っております。学区域しか知らない子どもたちが現実の社会をいろんな目で見てくるという体験を取り入れています。



想定外の反応がきて、そこで新たな「学び」が始まった。

無藤 「体験的な活動」が中心ですけれども、それを普段の授業でも活かせるようにしたいと私は考えています。たとえば、大人の周到な準備をはみ出すものを拾い上げるというのは、すでに、今日の話で言えば「ライブ」だと思いますが、子どもはいろんなことを授業で言うので、どれを拾い上げるかが難しい。つまり、どう授業を用意していくのか。「ライブの学び」を起こす条件をどう整えるかがポイントでもありますね。

鴻田 「ライブの学び」が起こるためには、教師側のスタンスとして「大人が少し離れて見守る」というのが大事ではないかと思っています。活動が順調に、スムーズにいくために、つつい先生や周囲のボランティアの方が手を出し過ぎると、子どもの「ライブの学び」はあせてしまうのではないかと。事前指導はしておくけれど、本番になったらもうあまり手を出さない。また、その活動の価値を子どもたちが実感するというのも大事だろうと思います。相手の人が喜

パネリスト



無藤 隆
白梅学園大学 教授



清水 一豊
東京都 大田区立
久原小学校 校長



鴻田 利治
新潟県 佐渡市立
行谷小学校 校長



池田 雅之
神奈川県 NPO法人
鎌倉てらこや 理事長

コーディネーター



鹿毛 雅治
慶応義塾大学 教授

慶応義塾大学
教職課程センター 教授
神奈川県生まれ
慶応義塾大学教職課程センター
助教授、スタンフォード大学心理学
部客員研究員などを経て、2005
年に慶応義塾大学教職課程セン
ター教授に就任。主著に「教育心
理学の新しいかたち(心理学の
新しいかたち)」、(誠信書房)、「子
どもの姿に学ぶ教師-「学ぶ意欲」と
「教育的瞬間」(教育出版)他。

「ライブの学び」で広がる、教育の可能性。

んでくれた、クラスや地域の仲間と一緒に生き物調べができたなど、子どもたちは活動そのものを「うれしい」「楽しい」とは言いますが、なかなかことばで表現できない。それを実感させるのは、その場での感想発表ではないかと思えます。すると、子どもたちは「ここは上手くいかなかったけれども、こんなふうになってよかった」とか、楽しかったことを語ります。子どもたちは「やってよかったな」という感覚を共有できる。価値を実感できれば、「また今度やってみようかな」という継続性にもつながると思えます。

いろいろな大人が関わる交流、出会いの場にも「ライブの学び」が起こる条件がある。

池田 「てらこや」の特徴は、2世代ではなく、3世代が交わり、それぞれの価値観、立場というものを認め合いつつ交流するところにあるんですね。団塊世代もいるし、40代の若い親御さん、あるいはシルバー世代もいたり、いろいろな大人の世代が関わってくる。そういう交流、出会いの場にも「ライブの学び」が起こる条件があるのではないのでしょうか。それから、世代を超えて集ったときに、自分の居場所である、自分らしくなる場である、ということ。私自身のことばでは「『てらこや』は自分育てと自分直しの場所」です。「出会い、居場所、自立」という装置を「てらこや」は作るんですね。上からの目線ではなく、お互いが学び合う双方向の関係によって、ライブ感覚が生まれてきているのではないのでしょうか。



長時間にわたるディスカッションに聴き入る参加者たち。「ライブの学び」にふさわしい「熱気」が会場を充たしていた。



第7回博報教育フォーラム

「ライブの学び」で得られるもの

総括

「ライブの学び」が「大きな学び」へと広がるとき

鹿毛 雅治 慶応義塾大学教授

「本物」と出会い「想定外」を引き起こす

私自身、非常に「ライブの学び」をさせていただいたような気持ちでおります。いわゆる「台本型の学習」が当たり前になって、家庭でも答えが見えていることをドリルで勉強させたり、生活経験もパッケージ型の経験ばかりさせているようなところがあるかもしれません。今日のお話から見えてきたのは、「学び」が「本物である」ということが大事だということ。「オーセンティックな学び」が最近よく言われますが、学校課題というのは、学ぶ内容も予め決まっています、そのルールを歩むようなことが多いですね。効果と効率ばかりで教育を考えてしまうと、いつの間にか魅力に乏しい学習になってしまいがちですが、「ライブの学び」は学びの魅力そのものです。「想定外」を大事にすることだし、「思いどおりにならない経験」や「わからないこと」が、実は学びにとってすごく大切だということがわかります。

「知・情・意」を総動員した学びであること

台本型の学習、つまり目的と効果、結果のみを重視する教育は、どうしても頭でっかちになってしまう。「ライブの学び」が目指したのは、それだけではなく、うれしい、楽しい、ワクワクという感情の部分、あるいは、やってみようとか、次は頑張ろうとか、「意志」の部分ですね。「知・情・意」の三位一体の学びを考える上でも、「ライブの学び」は3つを総動員した学びでしたし、本物とぶつかることで「もっと上手くできるようになりたい」と学習意欲も高められ、学びもより豊かな魅力と輝きを帯びることでした。

「双方向の関わり」から広がる学び

もう一つは、「関わり」ということ。「双方向」ということばが出ましたし、先生方のお話でも必ず触れられたことですが、人と人が関わり、人と文化、財が出て学びが始まり、実現する。子どものためだけに教育があるわけではなく、最初から想定してなくても、結果的に大人も学んでいたとか。われわれは大人が上に立つ教育ばかり考えていて、大人もできていないようなことを子どもに強いる傾向がある。それが「ライブの学び」では、平等な関わりの中から学びが生まれました。

「いま、ここ」の学びが「将来」へとつながる

最初、私は「ライブというのは現在進行形での体験だ」ということを申し上げましたが、一瞬一瞬、刹那的で、一見そのまま終わってしまうことを大事にすることが、実はもっとロングスパンで、憧れや、これからの生き方につながる「大きな学び」を作り出す力を秘めている。また、「ライブの学び」であればあるほど、「振り返り」や「自分のことば」による切実な確認や、入念な準備が大切であるということも共通した見解だと思えます。「ライブでしょ?」と丸投げしても「ライブの学び」は起こらないということですね。子どもたちにとっては、学びがライブな体験だからこそ記憶に残る。それこそ「志」ということばも出ましたが、いま学んでいることが将来へと開かれて、つながる。それが見えてきたことが、私にとっての大きな成果です。

明日を担う子どもたちのために。「ライブの学び」から得た、パネリストたちの「キーワード」。



清水「双方向」
「子どもを中心に、教員も、地域の人も、保護者も、お互いに育ち合う関係を作っていく。これからは大事なことだと思う」



鴻田「将来」
「子どもの将来を本気で考えるんだったら、一番ためになることは何なのか。それは『思いどおりにならない体験』です」



池田「人生はライブだ」
「子どもがいろんな人生の出来事に対応していく、それを応用させて自分の生き方にうまく転化していく」



無藤「わからないことの大切さ」
「学びとは、わからないことに向かうこと。「わからない」ということへのワクワク感が授業にどう出てくるか」

博報教育フォーラムについて

教育の旬のテーマを設定し
参加者一人ひとりが主体的に
学びの今と未来を考える博報教育フォーラム

博報教育フォーラムとは

財団法人博報児童教育振興会の主催する「博報教育フォーラム」は今年で第7回を迎えました。このフォーラムは、当財団が毎年、全国各地で児童・生徒の教育に献身的に取り組まれている先生方、学校、団体の方々に贈呈する「博報賞」の受賞活動から、教育の新しい潮流となるもの、その時々共通の課題となる旬のテーマを設定して開催しています。



博報教育フォーラム概要



基調講演

教育界から注目を集める専門家による、テーマを俯瞰した講演です。フォーラムのテーマを学術的視点や実践的視点など広い視点で捉え、テーマの意味や課題の整理、問題提起、解決の糸口の提案などを行います。



事例発表

「博報賞」受賞者が活動事例をフォーラムのテーマに沿って発表します。教育界に風を吹き込んだユニークで優れた実践を、毎年のキーワードをもとに、別の観点から眺めるとどうなるか?魅力的な教育モデルだけでなく、子どもたちへの教育実践者の熱意が伝わってきます。



ポスターセッション

事例発表者が特設ブースで活動事例を展示報告します。基調講演、事例発表の後、展示されたポスター、子どもたちの作文、実践カリキュラムやオリジナル教材を手に取りながら、発表者と直接質疑応答や情報交換を行い、テーマをより深く考え、理解し、実践的なノウハウを吸収する場です。



パネルディスカッション

フォーラム出演者全員が登場し、子どもたちのためにいま、何が必要かを問いかけ、トークセッションを繰り広げながら、新たなビジョンを提案していきます。基調講演、事例発表などで提示されたテーマを整理し、深めながら、参加者一人ひとりがより主体的にテーマを考えるきっかけを作ります。

フォーラム参加者の声をご紹介します



いままで「ライブの学び」を「体験的な学習」と捉えていました。しかし本日の基調講演では、そこに「授業」も入るということを教えていただいて納得すると同時に、日頃自分のしている授業がライブパフォーマンスとなっているかを考えました。(教員)

現代的な教育課題解決のための確かな方向性を見出せたような気がしました。理論的な構築にも裏付けられた有益なフォーラム。(教育研究センター副主幹)

「ライブ」の学びが、すぐ、実践できそうな気持ちになった。「ライブ」の大切さを、もっと、教員多数に理解していただけたらいいと思った。他の人に声をかけなかったことを残念に思いました。次回は、他の教員にも声をかけて、参加したいと思います。(校長)

最近、現場で先生方が「子どものストーリー」を語ることが少なくなった。成果にばかり先生方は追われて、「子ども」のライブの姿が見えにくくなっているのではないかと。予期せぬこと、心の奥にひびく感動、人生を決定づけるほどの出会い、そういう子どもの「輝き」にふれて、先生は一人ひとりの子どもと語りたい衝動におそわれるのだろう。(学校経営指導員)

ライブの学びのキーワード「想定外」「臨機応変」「日常に活かせる非日常」はとても刺激的で印象的だった。「失敗を否定しない」「失敗を恐れない」ことが大切だと感じた。(会社員)

現実社会の本物との出会い、関わりを通して味わえる本物の迫力が、次の学びの意欲を高めていくのではないかと思います。その本物を子どもたちにどう提供していくか。それには学校だけでなく地域や学生など、多くの世代の協力が大切であると思いました。(小学校教員)



学校現場だけでなくNPOなど、様々な立場の方からの主張を聴くことができ新たな視点に気づくことができました。(学生)

子どもたちの体験や学びの場の広がり、工夫・努力されている実践例は大変参考になりました。ポスターセッションでさらに詳しい準備・企画及び、蓄積されたものを伺い納得いたしました。(中学校教員)

学校が地域の中で核となるような体制作りも必要であり、地域の中になくはならないのが学校というようになくはないと思います。(教育委員会課長補佐)



編集後記

今回のテーマ「『ライブの学び』で得られるもの」は、生演奏や本物の風景に触れたときに体験する、突き動かされるような感動を積むことが、子どもにとっても大人にとっても大切なことではないか、という想いから生まれました。そして、今回フォーラムで紹介されたたくさんの事例から、「体験学習」の場でも、

通常授業の場でも、「想定外」の出来事を、どのように取り組んでいくかがとても大切であることや、「いま、ここで起きていること」が子どもたちの将来につながる大きな学びであることも知りました。このレポートは、教育実践者、地域、保護者の方々に、改めて「ライブの学び」について考えていただきたいという想いを込めて制作いたしました。ご意見ご感想をお待ちしております。